
春のおとずれ

鮎坂カズヤ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

春のおとずれ

【Nコード】

N2262B

【作者名】

鮎坂カズヤ

【あらすじ】

春。社会人としてこの街に引っ越してきた女性。この街は彼女がかつて半年だけ過ごした街。そして、彼女の初恋の思い出がねむる街。

この春、私はこの街に引っ越してきた。
かつて半年だけ過ごした街。もう十年以上も前のことだ。

父の仕事の関係で、私たち家族はいろんな土地を転々と移り住んだ。母が単身赴任否定派だったので、私も否応なく付き合わされることとなった。やけに周期の不安定な仕事で、そのせいで私たち家族も何度も別の土地へと移り住むはめに。ヒドい時は三ヶ月ですぐに転校なんて時もあった。

いくら親密になれそうな気の合う子がいても、すぐに転校。そんな状況がずっと続いたのだ。友達なんて作りようがなかった。転校してしばらくは届く手紙も、何ヶ月かすれば途切れてくる。そしてまた転校。私はずいぶんと孤独な小学生生活を送っていたと思う。

そんな生活を繰り返す中で、一つだけどうしても忘れられない街があった。それがこの街。この春、私が社会人として初めて一人暮らしをすることになる、この街。

それは、私の初恋だった。

引越しの片付けもほとんど終わり、久しぶりに街の見物ついでに散歩に出かけた。三月の涼しげな風が通り過ぎる。何か新しいことが始まりそうな、春の高揚感が胸をしめつける。しばらく歩いた先にある住宅街。そこで、それ以上に胸をしめつける懐かしい景色と出会った。

「まだあったんだ、この家」

小学生の頃、半年間だけ過ごした家。父の友人の借家。青い屋根。

庭のケヤキの木。錆びれてはずれかけた門は、もうなかった。

家の近くまで来てようやく気付いた。どうやらその家に新しい住人が住むらしい。引越し屋さんのトラックが新しくなった門の近くに停まっていた。運ばれている荷物や家具が真新しい。この家の新しい住人は新婚さんか、はたまた若い家族だろうか。

妙に住人のことが気になった。私にとってこの家は今まで住んだどの家よりも思い入れのある家だった。そこに住む人たちがどんな人なのか、興味がある。春の高揚感のせいなのか、小学生の頃に抑えていた好奇心がよみがえってきたのか、私はトラックのドライバーと話す家の主人らしき人をこっそり物影から眺めた。瞬間、息が止まった。

その人は、私の初恋の人だった。

転校してばかりで、友達を作ることにも学校に慣れ親しむことにも敬遠しがちだった私に、その人はいつも話しかけてくれた。自分で言うのもなんだけど、私はかわいくもなければ美人というタイプでもなかった。それに加えて「どうせまたすぐに転校するんだ」と、自分から他人に関わろうとしない、暗い感じの女の子だったと思う。そんな子に、その人は何かと話しかけてくれた。

「なあ、自分いつも本読んどるけどそれっておもしろいん？」

「なあ、明日みんなで映画見に行く予定なんやけど、自分も行かへん？」

「自分、髪型ショートにしたら絶対似合うで。オレが保障するわ」

ずいぶんとおせっかいな人だ、と思った。

転校してきた初日は、誰もが物珍しげに話しかけてはきたものの、私の無愛想な態度に次第に話しかけてくる人も少なくなった。どうせまたすぐに転校するんだ。いくらクラスで浮いてても、それくら

いがちょうどいい。そう思っていた私の心に、その人はするりと入り込んできたのだ。

どうしてあの人はこんなに私に構うんだろう。ひよっとして、私のことが好きなのだろうか？ いや、そんなはずはない。だって私なんかよりきれいでかわいい女の子はクラスの中にいくらでもいる。転校してきたばかりの暗い女の子なんか好きになるわけがない。

いや、でも。いや、やっぱり。

いつの間にか、私の心はその人でいっぱいになっていた。

ドライバーに話しかけているその人がこちらに振り返る。思わず身を隠してしまう。…何をやってるんだ、私は。もう社会人だといふのに。もう大人なのに。

そうだ。どういう経緯か知らないけれど、彼はこの家の住人なんだ。私だってこれからこの街で暮らすんだ。昔の同級生として、この家のかつての住人として、同じ街で暮らす者として、お互い大人なんだからあいさつくらいしてもおかしくないのではないか。うん、おかしくないはずだ。

一息つく。高鳴る鼓動を抑えながらそつと物影から身を出す。彼はドライバーではなく、別の人に話しかけていた。ショートヘアのきれいな女性だった。二人の視線は、女性の腕の中に眠る赤ん坊へと向けられていた。

一目見ただけで彼らの関係がわかる、優しくて暖かな雰囲気がそこにはあった。

しばらくその光景を眺めたあと、私はくるりと踵を返す。一息ついて、力強く歩き出した。

なんだか妙な満足感が心を満たしていた。

春の高揚感と相成って足取りも軽くなる。鼻歌まじりに笑みまでおまけでつけてしまおう。とにかく、気分がよかった。

私がかつて彼を想ったあの家で、彼への想いが染み込んだあの家

で、これからあの家族は新しい思い出を刻み込んでいく。あのケヤキの木も、新しい門も、青い屋根も。彼らの思い出の一つ一つになつていくんだ。

どきどきしていた。それは、あの頃彼を想っていたどきどきと少し似ていて、少し違った。

この春、私はこの街で暮らし始める。

かつて半年だけ過ごしたこの街で。初恋のあの人のいるこの街で。短めの髪が春の風に揺れる。何か新しいことが始まりそうなの、そんな気がする。

(後書き)

初めての作品投稿です！お見苦しい文になってないか心配ですが、最後まで障りなく読んでいただけただけなら幸いです。「引越し」っていうキーワードから10分で話を作ってみよう、という遊びをしていた時にできた話を膨らませて形にしてみました。こうしたらもっとよかったのに、なんてご指摘、ご指南ございましたらぜひともご指導よろしくお願いします！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2262b/>

春のおとずれ

2008年11月7日07時19分発行